

歌 三十首

三ヶ尻 妙

傍らですやすや寢息立つる友白馬乗鞍の懐に抱かれ
 梅池の木道行けば雪溪を割り向き合いて咲く水芭蕉
 八方池へリフトの下は花畑足に触れつつ風と乗りゆく
 孫が撒きし銀杏一粒かた隅に嵐去ること帰りて安堵
 茄子紺を好みし亡母ははのカーディガン寒波の来し日しみじみ温ぬくし
 幾千のみくじの花が結ばれて願望もろもろ辺りに溢る
 初詣で一羽のカワセミ飛翔して光明一筋見えたる如し

寒いから暑いからとて先延ばす我に一喝侘び助咲き初む
娘が忘れしリバーシブルの気に入りのあの雨傘は誰の手にある
山鳩はホバーリングして椎の木の生け垣に入る一羽の秘密
凍りつきまた凍りつき這い上がり鮮やかに咲くパンジー紫
咳ひとつ店の奥より聴こえて息子とわかる母の直感
青空にぼっかり浮かぶ綿の雲瓦礫の山を俯瞰しており
しろしろと八つ手は咲きて雨に濡れ震災の地も師走に入りぬ
チューリップ孫にむしられ半分にもそれでも懸命に白く咲きおり
息子と犬と桜舞散る見沼沿う刻々と時は過去に刻まる
吹く風に放物線を描きつつ桜ちるちる今年の桜
今散りし深紅のバラを踏まぬように朝の散歩の花径を行く
現世うつしよの喧騒吸い込み鬱蒼と神宮の杜は鎮もりかえる

たった一人の叔母の生活くらしが胸よぎる醒めて障子の明るむ朝
しみじみと去り逝く秋に身を浸す人生がゆく止まることなく
黄金色きんのユリの街路樹道照らす変哲せんとくもなき明日とは思わず
珈琲と一片のパンにジャムをぬり事足る我の下がる年金
寒風に枯葉の僅か残るのみ我が身も剥がされ裸木の如し
縫りつき片手で支え登りゆく階かゐ一段一段の重み
朝空に消え入りそうな残月はさっきまで夜道を照らしておりし
一枚の葉っぱがおのおの自己主張し秋を彩る山から里へ
衰えしオンブバツタが日向ぼっこ跨ぎて行くに飛ぶことはなし
街灯に写し出される我が影はひょっこらひょっこら踊りて歩む
窓外は色づく沙羅の病葉わくらばが時雨に打たれ寂しき極み